淳之介

夢を見る技術

わが文学生活 1975～1977

潮出版社

夢を見る技術

定価　九八〇円

昭和五十七年　三月　二十五日　印刷
昭和五十七年　四月　　十日　発行

著　者　吉　行　淳　之　介
発行者　富　岡　勇　吉
発行所　株式会社　潮　出　版　社

〒102　東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
　　230〇七八一(編集部)
振替　東京　五―六一〇九〇

本文印刷　大日本印刷株式会社
付物印刷　栗田印刷株式会社
製　本　東京美術紙工

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© J. Yoshiyuki 1982 Printed in Japan

目次

一九七五年

夢を見る技術 11
松葉杖の花売娘 15
懐しのノアノア 17
アリストテレス手相学 18
魅力的な「秋」 20
テリエ館 21
「花捨て」を推す 29
不思議な平和の三十年 30
『躁鬱対談』あとがき 35
チャプリンと七匹の猿 36

芥川賞選評 40
児玉隆也との最後の日曜日 42
コリンヌ・リュシェール 48
「陰翳礼讃」を読む 51
スロット・マシン 55
感　想 58
「狂才」筒井康隆 59
大　晦　日 65
一九七六年
石膏色と赤 73
洋の東西 77
小川国夫氏のこと 82
原稿用紙 86

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

香　水　88
「瘋癲老人日記」を読む　89
近来の収穫　96
追悼・舟橋聖一　97
片方の靴　101
「岬」について　105
眼の変化　107
『風景』編集後記　111
葉書の書留　114
高峰秀子さんの手相　117
『早起きは三文の徳』　121
前川直展によせて　124
『水上勉全集』を推す　125
拝啓ゲーテ様　126

花柳幻舟『子宮からの出発』評 131
『石膏色と赤』あとがき 132
難しかった選考 133
眼鏡屋へ 134
私の葬式 136
可能性への期待 140
和田芳恵氏の本領 142
滝田ゆうと玉ノ井と 147
二日酔に関する若干の考察 152
注目に値する資質 158
ダンディズムについて 160
税務署からの電話 166
『エンタテインメント全集』著者の言葉 167
松井勲さんとの因縁 168

『酒について』後書き　170
街角の煙草屋までの旅　173
郷里・岡山　180
日記から　182
感　想　195
怪盗マブゼ博士　196
秋山庄太郎のにがい視線　200

一九七七年

感　想　205
「?」と「!」の話　206
受験と人生　209
おんな　213
近　況　214

不作でもない　215
「男たちよ！」感想文　217
『世界ドジくらべ』まえがき　221
写真館へ　223
「澤東綺譚」を読む　224
初出一覧　232

装丁　前川　直

夢を見る技術

わが文学生活一九七五～一九七七年

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

一九七五年

夢を見る技術

私には目の覚める前にみる夢が多いらしく、鮮明に覚えていることがしばしばである。二十分以内に目覚めないと、その夢を忘れてしまうという説があるから、目の覚める前といったが、あるいは一晩中断続してみているのかもしれない。もちろんカラーであって、中間色もきれいに出る。いろいろの人にたずねてみると、天然色の夢が多く、以前は色のついた夢は狂人の証拠などといわれていたが、それは俗説である。

夢にも二種類あって、手繰(たぐ)ればどこまでも根の出てくるものと、その場かぎりのものとある。前者を毎日みていれば、小説のタネに不自由しないが、こういう夢は一年に一度くらいである。一時、枕もとにテープレコーダーを置いておいて、寝起きに吹きこんでみていたことがあるが、再生してみると寝呆けていてムニャムニャ言っているだけのことが多いので、「三日坊主」くらいでやめてしまった。

このごろ見た夢で、とても怖しかったのに、こういうのがある。

一人の男が横たわっていて、その顔が茹でたみどり色の蚕豆(そらまめ)でできている。その男は自分の顔の肉をむしり取って、緑色の口に入れてムシャムシャ食べている。蚕豆人間になってしまったので、ヤケクソの感じである。むしり取って穴のあいたその底もやはり茹でた蚕豆で、澱粉質のかたまりが層になって覗いている。

その男の振舞いは、絶望のあげくのものにみえるが、そういう心理よりも視覚的に怖しい。顔の部分がでこぼこになってしだいにすくなくなってゆく。そのとき目が覚めた。

夢だと知って、大そう安堵した。

私は数年後に、夢ばかり取扱って、それをキッカケにしたエッセイを四、五百枚書いてみようとおもっている。「夢」といえばフロイトの「夢判断」が有名で、三十年ほど前に読んだことがあるが、すべてのことをセックスに結びつけている。

先日、一句詠(よ)んで目が覚めた。

ならず者　アンパン二つ　来てパクリ

というので、俳句はおろか川柳でもないだろう。あまりに珍妙な言葉なので、生島治郎に電話をかけて、

「俳句を詠んで、目が覚めた」

と報告すると、相手ももちろん冗談に、

「それは俳句ではない。なぜなら季が入っていない」

生島は私より十歳ほど年下なので、正統的なアンパンを知らないのだろう。

古典的なアンパンには臍というものがあって、中央の小さな窪みの中に、桜の花の塩漬けが入っている。甘さと風味のある塩辛さのバランスがよろしい。つまり、アンパンの「季」は、春なのである。

その後、山藤章二と対談したとき、その言葉の解釈を求めると、フロイト理論を応用した。つまり、「アンパン二つ」は乳房のことで、自分の恋人を目の前でヤクザに強姦された、ということです、と言う。

フロイトの学説についてはそのうち調べ直してみようとおもっているが、次のような説であったとしたら、ある程度納得できる。人間の無意識の領域は甚だ広大で、意識という底板の隙間からこぼれ落ちたものが、うじゃうじゃ溜まっていてその分量は意識にあるものの数百倍か数千倍である、という心理学の学説があるらしい。その無意識の部分は、閉じ込められたままになるわけではなく、なにかのキッカケで意識の上に浮かび上る。夢のあいだに浮かび上ってくるものの微妙な組合せが、一つの突飛な夢を構成する。

人間の日常生活の半分以上は、セックスにかかわる考えが頭にある（もちろん、個人差とか年齢が関係してくる）から、無意識の領域に落ちこんでいるセックスについてのものが、夢の

あいだに浮かび上ってくる、という説をフロイトが立てているなら、半分納得できることになる。

蚕豆の夢は、自分である程度解釈できる。このごろアロエという植物の葉が、万病に効くということで流行しはじめている。ゼンソクにも効くというので鉢植えを買ってきたが、アトピー性（先天性体質）のものには効果がないということをあとで知った。私の疾患はアトピー性なのだが、面白い味がするので毎日ムシャムシャ食べている。ここらあたりに、この夢の鍵があるとおもう。

戦争中、私はさかんに夢をみたし、またよい夢をみるように念じて眠りについた。なぜなら、夢をみることは人生を二倍に生きることで、当時まもなく死ぬとおもっていたから、夢にすがるような真剣な気持であった。

悪夢は困るが、しかしその場限りのことだし、夢で美女を抱いたり旨いものを食べたとしたら、それは現実なのである。また、現実に旨いものを食べても、それは夢ともいえる。それに、夢での情交はけっしてあとくされがない。

これから真剣に、私は夢をみる技術を開発してゆくつもりだ。

（四月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton